研究メモ

僧兵研究

田中信道

僧兵に関する従来の諸研究は、そのほとんどが、僧兵の起源から、活動の史的展開を中心としたものに限ぎられているので、僧兵集団を構成した構成因子そのものの考察をもって、本文の目的とするものである。

僧兵発生の抽象的原因として、律合制の衰微ということが、考えられるのは、当をえているものと思われる。律合制下における経済生活の敗退者が、自己の生活を放案し、勢力あるものに吸収され、あるいは、かくまられ、隷属的地位に落ちていく中にあって、大社寺の下に集ってきたものが、僧尼令の乱とともに、僧の形態をとるようになっていきたと考えられる。

しかし、仏教界には、これらの僧と、対象的に位置する正規の得度を経てきた僧（学生階級）とが、併立しており、初期の活動においては、僧兵の活動原因が座主位をめぐるものであっただけに、座主と師弟関係にある学生階級が群訴の形で動いたが、その政治的とも思われる活動の慣例化にともない活動的になっていく山の環境が、さきの私度僧階級の活動を刺激したようである。こうした私度僧階級の成長をまつと、その活動形態は、急に激化してくる。この活動の激化の時期と堂衆階級の成長期とが、一致しているのは、この間の事情を物語るものであると考えられる。

寺・山門の分立抗争は、僧兵活動、なかんずく堂衆階級の活動を表面化し、又、正当化する十分な理由となっているが、こうした僧兵活動が盛んになると学生階級も参加合流という経過となり、禅師、又、座主、三綱という上層部も加わり、一山全体の動きと発展していく。

（浦郷中学校教諭）

近世に於ける西濃平野治水の史的考察

花村康秀

西濃平野においては、木曾、長良、揖斐の三大河川をもつ関係上、洪水頻発から逃れることができなかった。この自然的環境を克服するため必然的に、輪中・治水制度・水防の発達をみるのである。これらの輪中成立、治水か水防諸制度制定の過程に於いて、常に背後には水という自然力が左右しているのであるが、これに加わる親藩の軍事的、政治的政略が更にまた大きく美濃国に波紋を投じる。しかしながら、この政略に強行なる反抗でまず、一増水に対する認識を強くせざるを得なかった。

即ち、軍事的な「御囲い堤」の築造、あるいは、徒党団結を防止すること、更に肥沃な土地であることから領土が犬牙錯綜された。かかる不満の中にも、主に従い許される範囲内で美濃国独得な国法を取らざるを得なかった。自然的、人文的、軍事的諸原因から透発する洪水を最少限に防禦するため、治水法、更には透発以後の水防に於いろも、幕領及び藩領旗本の采地が入り乱れた西濃地方に於いては領主別に水防、治水制度を規定することは困難であった。よつてここに比較的統制の容易な輪中が単位となって、治水、水防がなされたのである。